

グイ・ガナ語の「食べる」と温度語彙

中川 裕

ながわ ひろし / 東京外国語大学、AA研共同研究員

多くの言語で基礎語彙に含まれる「食べる」や「熱い・冷たい」が、グイ・ガナ語ではユニークな体系や意味の広がりをもつ文化語彙の様相を見せる。

食動作語彙と温度語彙

「食べる」のような食動作と「熱い・冷たい」のような温度感覚は、世界のどの言語でも語彙化されていそうな意味領域である。人間は世界のどこに住んでも食事をすし、温度を体感する。そして、それを描写して人に伝えるだろう。最近の語彙意味の理論的研究でも、これら二つの意味領域が注目されている。グイ・ガナ語のこれらの意味領域における語彙はどんな特徴を持っているのだろうか。

二つの「食べる」とグイ・ガナの生業

最近の「食動作動詞」の調査の進歩によって、世界の言語における「食べる」の語彙化の普遍性と多様性がだんだん明らかになってきている。その成果を踏まえると、グイ・ガナ語の「食べる」の意味の語彙化

には、類例のない珍しい特徴が観察される。

グイ・ガナ語には、一般に「食べる」をもつばら意味する総称的な動詞はない。「食べる」を表現するときには、食べる対象となる食品の2区分（「肉」vs.「肉以外」）によって、「食べる」の単語二つ（「コー」vs.「オン」）のうちから一つを選ばなくてはならない。ここで重要なのは、二つの食動作動詞「コー」と「オン」はどちらも複合語や派生語ではなくて、単独で独立した要素だということである。つまり、「コー」にも「オン」にも食べる対象の食品（肉、植物、昆虫など）を表す要素は含まれない。ここでいう「肉」という食品タイプは、脊椎動物の肉である。動物性の食品であっても昆虫は「肉以外」の食品タイプとなる。食用昆虫や食用植物を「コー」するとは言えない。このように対象が「肉」か「肉以外」かによって「食べる」という動詞を区別する語彙化の報告は他の言語にはない。今のところカラハリ狩猟採集民の言語だけに確認される珍しい特徴のようだ。

そうすると、この珍しい特徴はどう説明できるか、が問題になる。グイ・ガナ語が、世界の言語の普遍的傾向から外れたこの語彙化パターンを発達させた背景は何か？と言いつ換えることもできる。ヒントは、彼らの生業の文化的パターンに求められそうだ。

彼らの伝統的生業は狩猟と採集である。狩猟は脊椎動物を対象とするのに対し、採集は植物や昆虫を対象とする。狩猟に従事するのはもっぱら男性であり、一方、採集の主な担い手は女性である。この生業における食糧獲得手段の2種目には男女別という彼らの社会的分業が組み込まれている。表1に要約する通り、2種類の「食べる」(コーvs.オン)は、2区分の食品(肉vs.肉以外)に呼応し、それはさらに、生業における食糧獲得手段2種目(狩猟vs.採集)とその主な担い手の性別(男vs.女)に呼応すると言える。グイ・ガナ語の「食べる」の語彙化がもつ稀少特徴の背景には、このような狩猟採集社会の文化のパターンとのリンクが認められそうである。この意味で、グイ・ガナ語の2種類の「食べる」は、文化語彙であり、そこにはカラハリ狩猟採集民の生業活動の構造が反映していると言える。

温度語とカラハリ乾燥帯

もう一つ、基礎語彙項目に該当しながら、グイ・ガナ語においては文化語彙と認められるものとして温度語彙の意味項目「高温・低温」について触れよう。温度語彙(熱い・あたたかい・冷たい・寒い・涼しい等)の意味領域は、ごく最近になって世界の様々な言語の比較の成果が論じられるようになった。この意味領域を扱った最大のプロジェクトは、ストックホルム大学のコブチェフスカヤ=タム教授による共同研究で、そこでは系統・地域・類型の点で広い範囲を覆う50余言語の資料を使った分析結果が報告されている。それを踏まえると、

猛暑の際に男性が涼を取る姿勢。この姿勢をとりながら、空気を少しずつ繰り返し飲み込み胃にためる。水分溜まったら、ゲップをする。ゲップが出ると涼しく感じる。



地下茎をおろして水分を絞り(上)、それを浴びて(左)涼を取る女性。おろしたものを口に含んで自分の体に霧状に吹きかけて横になりゲップをすると涼しく感じるという。

グイ・ガナ語の温度語彙（だいたい「熱い」と「冷たい」に当たる単語）がもつ派生的な意味の広がり方に、他の言語では報告されていない極めて珍しい特徴が見つかる。

温度感覚の単語（熱い・冷たい）は、温度以外の感覚への意味派生をすることが世界中の言語で観察されている。特に多くの言語に確認されるのは、感情・心理・苦痛・辛味への意味派生であり（日本語の「熱い」「冷たい」や英語のhot, coldにも感情や辛味への意味派生が認められる）、それはグイ・ガナ語の「クル（高温）」と「カイ（低温）」にも観察される。例えば、「クル（高温）」は怒りの感情に派生し、「カイ（低温）」は冷静な感情に派生する。

ところが、グイ・ガナ語には、他の言語では報告されていない二つの感覚への意味派生が発見された。それは、聴覚（音色）と嗅覚（臭気）である。しかも、興味深いことには、表現の対象となる音色および臭気は限定されている。音色は雷鳴だけ、臭気は腐敗発酵臭（典型的には肉の腐敗発酵臭）だけである。温度語の「クル（高温）」と「カイ（低温）」が雷鳴と腐敗発酵臭に適用され派生される際の意味は表2に要約する通りである。

表2に示すように、「クル（高温）」と「カイ（低温）」が音色を描写する場合は、音色の高低と温度の高低が対応している。「熱い雷鳴」とは甲高い雷鳴を意味し、「冷たい雷鳴」は低い音域の雷鳴を意味する。また、「クル（高温）」と「カイ（低温）」が臭気を描写する場合は、有機物の分解臭の程度の高低が温度の高低に対応している。「熱い臭気」は腐敗臭が強烈なことを、「冷たい臭気」はほどほどの発酵臭を放つことを意味する。

グイ・ガナ語の温度語が示す、「温度→音色」の意味派生と、「温度→臭気」の意



肉食獣が食べ残したと思われる獲物（スプリングボック）を拾う。注意深く肉の傷みを見て、ニオイを嗅いで新鮮さを確かめてから持ち帰って食べる。

味派生は、通言語的に珍しい特徴である。ここに見られる温度と音色のリンク、温度と臭気のリンクは、一体どう理解すればいいのだろうか？ この問題を解く鍵はどこにあるだろうか？ おそらく、(1) グイ・ガナ人にとっての温度語（「クル（高温）」と「カイ（低温）」）がもつ彼らの文化特有の意味、(2) それに影響を与えている自然環境の温度的特色、(3) 雷鳴の音色とその危険度の関係、(4) 肉の分解の程度、つまり発酵（美味）から腐敗（有毒）まで、を

測る尺度としての発酵臭・腐敗臭、これら(1)から(4)が有機的に連合しているグイ・ガナ人の知識に、手がかりが見出せるだろう。

カラハリ乾燥帯における熱さは、そこに住む動植物を脅かす力を持つ危険なものだ。高温は危険性と結びつく（低温は安全と結びつく）。また、雷鳴の音色が甲高いと、近くに落雷する危険がある（雷鳴が低音だと比較的危険である）。さらに、肉の甚だしい腐敗臭はその毒性を示し危険を意味する（肉の熟れた程度よい発酵臭は安全であることを意味する）。そう考えると、温度語の「クル（高温）」は「危険だ」に意味派生していると解釈できる。すると、「熱い雷鳴」は「危険な雷鳴」を、「熱い臭気」は「危険な臭気」を意味すると理解することができる。

グイ・ガナ語の文化語彙としての温度語に見られる世にも稀な意味派生パターンには、カラハリ乾燥帯の危険な熱さと折り合いをつけながら、雨季には落雷の危険に注意を払い、獲物肉の発酵・腐敗に気を配り食中毒の危険を回避する、カラハリ狩猟採集民の民族誌の断章を読み取ることができ

「食べる」を意味する動詞	食品タイプ	食糧獲得手段（社会的分業）
コー「(肉を) 食べる」	脊椎動物の肉	狩猟（男性）
オン「(肉以外を) 食べる」	植物・昆虫	採集（女性）

表1 グイ語・ガナ語の2種類の「食べる」。

	温度語	直訳	実際の意味
雷鳴	クル「高温（である）」	熱い雷鳴	雷の音色のピッチが高い
	カイ「低温（である）」	冷たい雷鳴	雷の音色のピッチが低い
臭気	クル「高温（である）」	熱い臭気	腐敗臭が甚だしい
	カイ「低温（である）」	冷たい臭気	発酵臭がほどほどである

表2 グイ・ガナ語の温度語の聴覚と嗅覚への意味派生（温度語が雷鳴と臭気を修飾する句の直訳と実際の意味）。